

ヘブル4章 「安息に入る」

1 A 安息に入る努力 1 – 13

1 B 残された約束 1 – 11

1 C 靈的安息 1 – 2

2 C 天的安息 3 – 11

2 B 裸にする御言葉 12 – 13

2 A 折にかなった助け 14 – 16

本文

ヘブル書 4 章です。ヘブル書 4 章のテーマは、「安息に入る」です。この忙しく、ストレスのある社会の中で「安息を取る」ことの重要性は私たちに切実な問題となっています。キリスト者にとっての安息が何であるか、この章からそのはっきりとしたところを学び取りましょう。

1 A 安息に入る努力 1 – 13

4 章は 3 章の続きです。4 章 1 節にて、「こういうわけで」という言葉から始まっています。どういうわけで、なのか？と言いますと、イスラエルが主の偉大な救いの御業をエジプトから出る時に目撃したにも関わらず、大半がエジプトで死に絶えてしまった、その大きな教訓について話していました。もう一度、3 章 7 節から 11 節まで読んでみましょう。「ですから、聖霊が言われるとおりです。「きょう、もし御声を聞くならば、荒野での試みの日に御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにしてはならない。あなたがたの先祖たちは、そこでわたしを試みて証拠を求め、四十年の間、わたしのわざを見た。だから、わたしはその時代を憤って言った。彼らは常に心が迷い、わたしの道を悟らなかった。わたしは、怒りをもって誓ったように、決して彼らをわたしの安息にはいらせない。」これは詩篇 95 篇からの抜粋です。紀元前千年頃、ダビデが聖霊に導かれて書いたものです。この箇所に基づいて、ユダヤ人信者が不信者のユダヤ人による迫害から免れるため、神殿礼拝を行うないうがユダヤ教の中に留まろう、水のバプテスマや、教会に集まることによってイエスを告白することはやめようとしていました。こうした彼らの動きに対して警告を発しているのです。彼らがそのことをすることによって、彼らが経験する大きな損失があります。それが一言でいうと「安息」であります。

1 B 残された約束 1 – 11

1 C 靈的安息 1 – 2

4:1 こういうわけで、神の安息にはいるための約束はまだ残っているのですから、あなたがたのうちのひとりでも、万が一にもこれにはいれないようなことのないように、私たちは恐れる心を持つてはなりませんか。

「神の安息にはいるための約束」というのは、先に読んだ 3 章 11 節の言葉です。「決して彼らをわたしの安息にはいらせない」と言われたけれども、イスラエルの民が荒野で放浪して死に絶えたために、約束の地に入って安息することができなかつたら、安息はそのまま残っていて、今、私たち信者に用意されている、という意味です。けれどもその用意されている安息に、私たちも、ややもすると入れないかもしれないという警告です。

このことについての警告はすでに私たちは、3 章 12-13 節で読みました。「兄弟たち。あなたがたの中では、だれも悪い不信仰の心になって生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。「きょう。」と言われている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。」ユダヤ人の信者が経験したように、私たちもこの世の激しい濁流の中に生きています。モーセを頭とするユダヤ人共同体があって、そこから離れるものなら村八分があるように、私たちもキリストを告白するならその疎外は免れることができません。だからこそ、日々互いに励まし、神の約束を信じるのをあきらめたりしないように、また不信に陥って、罪の惑わしを受けないように気をつけない、と勧めているのです。

4:2 福音を説き聞かされていることは、私たちも彼らと同じなのです。ところが、その聞いたみことばも、彼らには益になりませんでした。みことばが、それを聞いた人たちに、信仰によって、結びつけられなかったからです。

ここは、キリスト者の霊的な前進のために、絶対不可欠の言葉です。イスラエルの人たちは、モーセによって数多くの良い知らせ、神のすばらしい言葉を聞きました。ところが、何度聞いても、それが具体的な自分たちの生活で生かされなかったのです。「聞いた人たちに、信仰によって、結びつけられなかった。」とあります。御言葉をたくさん聞くのだけれども、それが自分の周りで起こる出来事に当てはめることなく、そのまま日々を過ごしている状態です。聞いていることで、そのまま自分は主の中にいると思いついて入っている状態であります。

多くの人々が、心配しなくてもよいことで心配し、反対に本当に心配しなければいけないことで無頓着であります。それは、「自分の行い」に注目して、「主が語っておられることに聞き従う」ことに注目していないことです。信じるというのは、聞くことから始まります。「そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。(ローマ 10:17)」神が御霊によって、心に語りかけられます。その語りかけは、もはやかつて石の板に律法が与えられたのと異なります。心の中に律法が、御霊によって与えられるのです。主が語られるので、全幅の信頼を持ってその言葉に聞き従おうとします。その神への愛の応答が、そのまま従順なのです。

イスラエルの民が漠然と神を知っているだけで、その荒野の旅における過程、プロセスにおいて、自分の今までの生活や考え方を押し進めてしまったために問題が起りましたが、同じように私たちは、神が救ってくださったことだけを知るだけでは駄目で、神がその後どのように導いておられるのか、その具体的な指針をも、神から御言葉によって、御声を聞いて動いていくのです。それには、神の前に出ていくという不断の努力、またへりくだりが必要になります。

2.C 天的安息 3-1.1

4:3 信じた私たちは安息にはいるのです。「わたしは、怒りをもって誓ったように、決して彼らをわたしの安息にはいらせない。」と神が言われたとおりです。みわざは創世の初めから、もう終わっているのです。

ここから、いろいろな安息について見ていくことになります。一つ目は、「信じた私たちは安息にはいるのです。」とあります。ここをもっと正確に訳すと、「安息に入っているのです」となります。つまり、もうすでに享受している安息です。これは靈的安息です。

靈的安息とは何か？ マタイ 11 章 28-30 節を開いてください。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」イエス様の初めの命令は、「来なさい」というものです。イエス様のところに来ます。これは、救いの安息です。黙示録の最後にも、こういう呼びかけがあります。「いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。（黙示 22:17）」単純な救いの呼びかけです。

神が罪の贖いのために、すべてのことをキリストにあってしてくださいました。主がゲッセマネの園において、「この杯をわたしから過ぎ去らせてください。けれども、あなたの願われるようにしてください。」と祈られた、あの苦悩です。主が罪をご自身に負われて、そして最後の言葉が「テテスタイ」、「成就した」でありました。したがって、私たちは救われるために何かを行うことから解放されました。主が救いの業を完成されたので、私たちはただこの方のところに来れば良いだけです。私たちの日々の交わり、また週ごとの集まりにおいて、救いの安息であられるキリストと交わることができます。

ですから「救いの安息」があります。次に、「従順の安息」があります。「わたしから学びなさい」という命令です。主の命令にしたがうことによって、私たちの魂は休みを得ます。命令を守ることがなぜ休みなのか？と思われるかもしれませんが、ここに「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」とあるとおり、キリストの命令に従うことは重荷とはなりません。神の愛の中にとどまり、その愛の中で神の命令に従います。そうすれば、ここにある安息を手に入れることができるのです。

4:4 というのは、神は七日目について、ある個所で、「そして、神は、すべてのみわざを終えて七日目に休まれた。」と言われました。4:5 そして、ここでは、「決して彼らをわたしの安息にはいらせない。」と言われたのです。

ここでの安息は、一つは「創造の安息」です。すべての安息の土台、モチーフとなっています。創世記 2 章 2-3 節にある神の安息であります。「それで神は、第七日目に、なさっていたわざの完成を告げられた。すなわち、第七日目に、なさっていたすべてのわざを休まれた。神はその第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。それは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである。（2:2-3）」

神は天と地を6日かけて、お造りになりました。そしてすべての万象を完成されました。完成されたので、もう創造する働きをする必要はなくなったので、休まれたのです。これは、神が仕事に疲れて、休憩を取っているということではなく、完成されたということです。私は、以前、子供たちに天地創造の話をするとき、こう教えました。「自分が作ったプラモデルが全部できあがりました。あと、プラモデルができあがるために、何かすることある？ ないよね。完成したから、もうプラモデルを造るためにすべきことはなくなりました。これと神さまが行なわれたことは同じです。休みを取られたというのは、天地を造られる働きが完成したからです。」

これが、聖書の中に書かれている「安息」の意味です。すべてのものが完成したから、その完成したところにとどまっていることが、安息しているということになります。安息とは、仕事の間の休憩時間ではなく、完成したと言い換えられるものです。ですから、私たちは自然を見て、天地創造の御業をほめたたえることができます。また、人体の精密さを見て、その精巧さに驚き、神をほめたたえます。ここに安息があります。

そして、この創造の安息が土台となって、ヨシュアたちがカナンに入った時、安息を得られるという約束がありました。「カナンの安息」と読んでよいでしょう、「なぜなら、あなたが、はいて行って、所有しようとしている地は、あなたがたが出て来たエジプトの地のようではないからである。あそこでは、野菜畑のように、自分で種を蒔き、自分の力で水をやらなければならなかった。しかし、あなたがたが、渡って行って、所有しようとしている地は、山と谷の地であり、天の雨で潤っている。そこはあなたの神、主が求められる地で、年の初めから年の終わりまで、あなたの神、主が、絶えずその上に目を留めておられる地である。（申命 11:10-12）」これまでは、労苦して作物を育ててきた。けれども、約束の地では、もちろん農耕は行うけれども、主が一方向的に恵んでくださるものを食べるようになる、ということです。

そして、敵からの救いにおける安息もあります。「あなたがたは、ヨルダンを渡り、あなたがたの神、主があなたがたに受け継がせようとしておられる地に住み、主があなたがたの回りの敵をことごとく取り除いてあなたがたを休ませ、あなたがたが安らかに住むようになるなら・・・（申命 12:10）」これは、ダビデの時代になるまではっきりと見えてこなかったものです。イスラエルの不従順のため、敵との戦いを強いられていましたが、ダビデの時によりやく敵を取り除くことができ、安息が与えられました。しかし、その安息はソロモンの晩年で彼が生ける神から離れることによって、そしてその後の歴代の王が神に背いたことによって、一時的なものになってしまいました。

4:6 こういうわけで、その安息にはいる人々がまだ残っており、前に福音を説き聞かされた人々は、不従順のゆえにはいれなかったのですから、4:7 神は再びある日を「きょう。」と定めて、長い年月の後に、前に言われたと同じように、ダビデを通して、「きょう、もし御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにすることはならない。」と語られたのです。4:8 もしヨシュアが彼らに安息を与えたのであったら、神はそのあとで別の日のことを話されることはなかったでしょう。4:9 したがって、安息日の休みは、神の民のためにまだ残っているのです。

これはどういうことかと言いますと、確かに詩篇 95 篇の内容は、民数記にある、イスラエルの民がカデシュ・バルネアで不従順になって、四十年間、さまよったことを話していますが、問題はその書かれた時期です。ヨシュ

アが約束の地に入った紀元前約千四百年からだいたい四百年経った後に、ダビデが書いたものです。したがって、ダビデの意味する「安息」というのは、ヨシュアが約束の地に入った時のことではなく、また新たな日の設定をしているのだ、ということになります。つまり、ヘブル書を著者が書いている時点でもこの安息が残されている、ということでもあります。

ですから、ここまでの安息をまとめますと、「霊的安息」があります。キリストの救いに休み、またキリストに従うことで安息を得ます。次に、「創造の安息」があります。さらに、「カナン」の安息がありました。そしてヘブル書の著者は、もう一つの安息を取り上げます。

4:10 神の安息にはいった者ならば、神がご自分のわざを終えて休まれたように、自分のわざを終えて休んではずです。4:11 ですから、私たちは、この安息にはいるよう力を尽くして努め、あの不従順の例にならって落後する者が、ひとりもないようにしようではありませんか。

ヘブル書の著者が、詩篇 95 篇の安息の約束を適用させているのは、「天」であります。私たち信仰者が天に入ることによって、ようやく自分の業を終えて休むことができる、というものです。黙示録に、大患難時代に殉教する聖徒たちに対して、次のような言葉を神は残しておられます。「また私は、天からこう言っている声を聞いた。「書きしるせ。『今から後、主にあって死ぬ死者は幸いである。』」御霊も言われる。『しかり。彼らはその労苦から解き放されて休むことができる。彼らの行ないは彼らについて行くからである。』（黙示 14:13) 」

ヘブル書では、地上に対する天を比較してその対比を強く打ち出しています。地上におけるユダヤ教の共同体は地上にあるものですが、御子の支配する神の家は天に属しています。今は、困難があるけれども、以前のイスラエルの民のようになってはいけない、という強い戒めです。ちょうど荒野にいたイスラエルの民がその困難に耐えられずに、あきらめてしまいました。同じように、今は困難があるけれども、その後には天があり、安息があるのだ、という約束です。

戦時中、ホーリネスという教団が日本の当局によって弾圧を受けました。一斉検挙によって捕えられた教会指導者の一人に、小出朋治（もとほる）という人がいます。他の多くのキリスト教指導者が、自分の教会のこと、また自分の家族のことを思って、天皇かキリストか？と問い質された時に妥協したのに対して、彼はそれをしませんでした。彼が特高により拷問されているとき、一度だけ書くのを許された手紙の中には、「生還を願わずして死に至るまで信なれ」と書かれていたそうです。

私たちが今のこの世を思うのではなく、天を思いたいと思います！ここから私たちの愛する主なるイエスが来られて、私たちを引き取ってくださるのです。「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。（ピリピ 3:20-21) 」

2 B 裸にする御言葉 12 - 13

4:12 神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。4:13 造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。

今、著者がなぜ神の御言葉の命と力について話しているのでしょうか？それは、私たちが不信仰の心になっているか、罪の感わしを受けているのか、そういったことをことごとく、自分の心を露わにしてくれるのは、神の御言葉である、ということです。私たちが、自分の心について知っていると思っていたら自分を欺いています。自分で自分のことすら、分かっていないのです。この心の問題を、どのように解決したらよいのか？それが、神の言葉であります。

神の言葉は、まず、生きています。そして力があります。イザヤはこう言いました。「雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。(55:10-11) 」

そして次に、「両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊の分かれ目さえも刺し通す」とありますが、私たちはここで、人が体だけで造られているのではないことが分かります。私たちは、三つの部分で造られています。体と、霊と魂です。魂は精神と言い換えても良いですが、知・情・意といわれる部分で、私たちが考え、感じ、また意志決定をする部分です。けれども、人間はそれだけで造られているのではなく、霊があります。これは、神を意識する部分です。そして、神のみことばは、この魂と霊の分かれ目を刺し通す力があると書いてあります。

私たちは、いろいろな活動を行なっているときに、識別力がないために、誤ったことをとかく行ないます。同じ伝道や奉仕活動を行なっている時でさえ、自分の心理的欲求を満たすための手段に変えられたりします。霊的ではなく、宗教的あるいは魂的と言っても良いかもしれませんが。私たちはそのことを区別しなければいけないのですが、それをすることができるのは、唯一、神のみことばだけです。他人の証しを聞くことは、健徳につながります。けれども、その体験はその人に与えられたものであり、自分に対しては異なる働きを、神は用意されているかもしれないのです。神のみことばのみが、私たちを実質的に、霊的に成長させるのです。

そして、神の御言葉によって、自分は神の前で何一つ隠せるものはないことを知ります。心の奥底まで知られる神は、みことばによって私たちの心を探り、なにが良いことで完全なものであるかを示してください。私たちは、神の前では裸です。イエスさまがこう言われました。「おおいかがぶされているもので、現わされないものはなく、隠されているもので、知られずに済むものはありません。ですから、あなたがたが暗やみで言ったことが、明るみで聞かれ、家の中でささやいたことが、屋上で言い広められます。(ルカ 12:2-3) 」そして、私たちは弁明、申し開きをします。心にあるわずかな動きであっても、それを口に出して、すべて言い表せなければいけな

いのです。そして、神はその申し開きに応じて、ひとりひとりを裁くのです。

だから、今、何となくごまかして、上手にキリスト教信仰と世の間を世渡りしようとしても、終わりの日には言い訳は聞かないのだよ、という警告です。当時のユダヤ人信者が、この部分をごまかそうとしていたので、それはできないことを著者は言明しました。

2 A 折にかなった助け 14 - 16

4:14 さて、私たちのためには、もろもろの天を通られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられるのですから、私たちの信仰の告白を堅く保とうではありませんか。4:15 私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。

著者は、大祭司なるイエスをヘブル人信者に強く教えてようとしています。イエスが神の御子でありながら、人となられて、私たちのあらゆる苦しみをとられて、最後は罪の供え物となったこと。その苦しみのゆえに、今、父なる神に対して私たちのために執り成すことができになる大祭司なのだ、ということをお教えています。5章から、イエス様の大祭司の働きを詳しく論じていきます。

初めに、「もろもろの天を通られた」とあります。私たちが天に入る、安息に入るのは困難が伴うけれども、イエスはもろもろの天を通ることのできた、力あり主権を持つ方であることを示しています。天には、物理的な空である第一の天、悪霊や悪魔のいる「空中」と呼ばれる第二の天、そして神の御業のある第三の天に主に分けられますが、主はどんな勢力に対しても、圧倒的な力と主権を持っておられるのは、これらの諸々の天よりも高く上げられ、神の右の座に着いておられるからです。そして、イエスが偉大な大祭司であり、「神の子」とあります。神の子としての働きをヘブル書 1章で学びました。万物を創造し、また万物を支配し、それを相続する王座に着いておられる方が、御子であります。

この方に対する信仰告白を保つために、主は私たちがこの地上で受けている困難と共にいてくださるのです。これがすごいことです。「私たちの弱さに同情できない方ではありません。」とあります。この「同情」とは、単なるかわいそうと思うことではなく、共に苦しむという意味合いがあります。主はベツレヘムで人となられて、十字架に至るまでのすべての道で、私たちのあらゆる、肉体にある弱さを知りました。

主イエスと私たちの違いは、「罪は犯されませんでした」というところです。けれども、誘惑は私たちとまったく同じように受けられました。主が公生涯を始められる時に、神が御霊によって導かれたのが悪魔の誘惑です。石をパンにしる、という肉の欲に訴える誘惑。神殿の頂から落ちてみる、という、そして御使いに助けられて自分の力を誇ることができる、という自慢。さらに、世界の栄華を見せて、これを自分のものにできるという、目の欲。またこれも自慢でしょう。これらの誘惑をすべて受けられました。

そして私たちと同じように、疲れるし、他にもいろいろな肉体の弱さを持っています。病床におられる方は、む

ち打ちのイエスと十字架のイエスを思い出してください。主は、病の人であり、すべての病をその肉体的苦しみによって受けられました。

けれども、罪を犯されなかったのです。だから、私たちも、この誘惑には耐えられない、この困難は耐えられない、と思っても、主はそばにおられて、私たちのその弱さに同情し、そして罪を犯さないように、特に不信仰にならないように助けることがおできになります。

4:16 ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。

私たちは、なにが私たちの弱さを克服してくれるか、その源泉になっている力をここで読むことができます。それは、「あわれみ」であり「恵み」です。私たちは、とくに自分が弱くなっているときに、神から離れてしまっているってしまいます。悪魔は兄弟たちの告発者ですから、悪魔は私たちに、「ほら、お前は神さまに良く思われていない、だめなクリスチャンなのだ。神さまに助けを求めるなんて、そんな大それたことはしなさんな。」と言います。しかし、これは悪魔の嘘です。私たちは、弱いからこそ、強いといえる存在です。私たちの弱さに、キリストの力が完全に働きます。

ここに、神の御座が「恵みの御座」と呼ばれていることに注目してください。キリストが死なれて、ご自分の血をたずさえて、天に入られました。そこで、人の罪のために下すべき神の怒りは、すべてなだめられました。神の御座はもはや、さばきの御座ではなく恵みの御座となったのです！ イエスさまが十字架につけられたときに、神殿の垂れ幕が上から下に真っ二つに裂けました。大祭司が年に一度だけ入ることのできる、神が現われる場所が、すべて開かれてしまいました。これは、キリストが、神と人との間の仕切りをすべて除き去ってしまわれたからです。

ですから、私たちは、何ら遠慮するものはありません。私たちの前に広がっているのは、神の恵みという大きな平野です。何も私たちを隔てるものはなく、今、自分がいるところで、「神さま」と呼びかけて、そのまま天におられる神とお話することができるのです。「大胆に」神に近づくことができます。私たちは何と、おこがましく神の前に近づくことができるでしょうか。神に隠しているものがあるかのように、自分をあまり出さなくて、良い行ないをしてから神の前に大胆に近づく、と思っています。しかし、神の前ではすべてが裸なのです。すべてが見られていることを知って、それでも、神が恵みによって私たちを救ってくださったことを知って、それで大胆に神に近づくのです。